vol.6 坂の町　難波宮周辺の暮らしと文化

難波の発祥の地～大江地区「南大江編」

難波津と上町台地という優れた立地は、坂の多いまちに武士と町人が共存、共栄する豊かな暮らしを育みました。
今でもこの辺りを歩くと、坂や路地、風景、地名などから、積み重なった暮らしの歴史を感じることができます。

【中央区史跡文化事典】に、詳しい解説があります。※本文中にも注釈で案内しています。中央区役所で配付していますので、ぜひ手にとってご覧ください。

上町台地の西斜面

坂のある風景

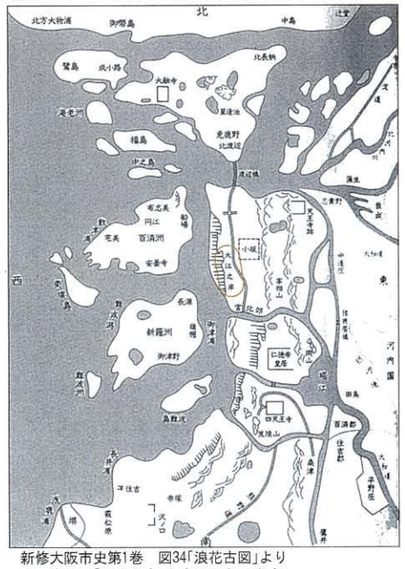
難波津に突き出した上町台地。政治の要衝の地として歴史を重ねたまちで、昔も今も変わらないのは坂のある風景です。

難波津に突き出た上町台地に造られた「難波宮」

「難波津に　咲くやこの花冬ごもり
今は春べと咲くやこの花」

この歌は仁徳天皇即位の時に、百済から来た王仁（わに）博士が詠んだといわれています。仁徳天皇は、4世紀初めの人なので、このころから難波津があり、な～10世紀にかけて、日本を代表する国際港だったことがわかっています。

さて、「難波」と書くと現在の人は「なんば」と読む人が多いのですが、語源は、太古の時代の「難波津（なにわづ）」で、文字通り、波が荒かったことを示していました。波が荒かったため、舟は上町台地を迂回して、玉造から上がったほどでした。「なにわづ」という言葉は、南大江小学校の校歌にも使われています。右図の浪花古図を見ると、川の西の岸にあるので、「大江之岸」とよばれたのがよくわかります。今の松屋町筋から東辺りと思われます。



新修大阪市史第1巻　図34「浪花古図」より
地図中央に「大江之岸」と書いてあります

坂のある風景「いま」「むかし」

大江の辺りを横断する中央大通は、戦後の都市部への交通をスムーズにするため、昭和30年代にできました。阪神高速と共にまちを分断するこの道路ができる前はどんなまちなみだったんでしょうか？

フィールドワークで法円坂周辺を歩くと、大きな擁（よう）壁の見える道や段数の多い階段がありました。実は中央大通ができる前は、大きな坂があったんです。

「生國魂神社夏まつりのだんじりを通る時は苦労したわ。坂がきつくて登れなかった。」と語る推進委員の村上さん。中央大通ができたことにより、そのレベル差がなくなりました。それでも上町筋から松屋町筋のエリアには、今でも自転車ではキツイ坂がありますね。

松屋町筋から東を見る

登ると息が切れそうな階段！

高速道路も難波宮には遠慮？

法円坂交差点から東を見る。左は阪神高速、中央大通。右は難波宮跡

先ほど、中央大通が開通されたことにより、坂が少なくなったと述べましたが、昭和45（1970）年に阪神高速が開通すると、また風景が一変しました。

ところが法円坂付近は、一旦高速の高さが低くなっています。それはなぜなんでしょう？

法円坂は、難波宮の北側にあたるため、阪神高速建設の際、地下に埋もれている文化財を避けるように、壊さないように、基礎をできる限り小さくしました。阪神高速の高さを一旦、地上レベルになっているのが法円坂です。こういった理由のため、南大江辺りからは今でも、大阪城がよく見えているのです。

狭くて急な坂「狸坂」

タヌキがいる？「狸坂」

南大江公園から南西へ10mいったところに昔「狸坂」という坂がありました。松屋町筋から1本東に入るには、ご存じの通り急な高低差があります。幅が1mと狭くとても急なので、横に生えている木や竹につかまりながら歩いたとのこと。

昭和20年空襲時の狸坂見取り図

おたぬきさん

南大江公園の中にある「おたぬきさん」と親しまれているとても珍しい神社。地元の人に聞くと、「『たぬきがおったから、だまされて、帰るのか遅くなった』という言い訳を、大人も子どももみんな使ったなあ」という声も。なぜ公園の中にあるのでしょうか？

明治時代から神明神社をまつっていましたが、戦時中、飛行機が墜落し焼失しました。また、昭和30年代後半、この辺りでよく火事が起こりました。昭和41（1966）年に狸坂にあった狸坂大明神の社を公園の中に再建。それ以来、火事がなくなったことから、毎年お祭りを開催しています。

昔は、山伏のホラ貝の音と、竹の「ドーン」となる音で盛り上がりました

夏まつりととんど祭り

南大江公園の夏まつりでは、子どもにお菓子を配りながら、まちの約束事などを守るように、心がけて行っているとのこと。地域の子どもたちを地域で育てていくためです。

1月15日には「とんど祭り」。青竹が「ドーンドーン」と鳴り響く音にびっくりして公園に集まる人も。昔のとんど祭りでは、上の写真のように、「山伏」も登場！那智大社、生國魂神社と関わりのある飛龍神社も同じ場所にまつられており、熊野街道の「第二王子」として、熊野詣の人々も立ち寄る場所です。

町衆が祝う大阪薪能

この地域は生國魂神社の氏子が多いこともあり、戦後、まちの復興・発展を祝いたいとまちの人々が、450年前の故事にならい、大阪薪能が昭和32（1957）年に、復活させました。生國魂神社では、大規模な社殿の修復等の際に、氏子の町衆が能を奉納する伝統があるのです。

自治・産業・文化

暮らしの足跡

江戸時代に全国から集まった職人や商人。町人は武士とともにまちをつくり、自治を組織しました。

町名に刻まれた地域の由来

伏見城から移り住む職人、町人が多かったことはよく知られています。地名の由来には、諸説があり、当時の暮らしやまちなみの様子がうかがえます。

地図面には、由来のある地名に説明書きを加えています。住居表示やまちなみを見ながら、昔の面影を感じながら歩いてみては？

町人による町人のための自治「南組惣会所」

奉行所との橋渡し～惣会所

江戸時代の大坂は、幕府の役人が支配していました。でも役人が少数だったため、町人が自治を運営し、幕府の補完をしていました。600余りの町がありましたが、それらは「大坂三郷」とよばれ、幕府から町人による自治が認められていたのです。

「元禄の頃には、商都大坂は620町となり、人口は最高となり、42万人（内、武士家族は1万人、98%が町人）でした」

「惣年寄」は、地域の代表者？！

南組惣会所をはじめ、各惣会所では、数名の町人の代表者である「惣年寄」が、町奉行からの触（ふれ）を町へ伝達したり、船や消火活動の管理など、町の暮らしを支えるための仕事をしていて、幕府との接点となっていました。

「惣年寄」は今でいうと「連合会長」にあたるような地域の代表者でした。

こういう形で町人による自治体制がとられていたと考えると、昔も今も、地域で住んでいる人が地域を守り、維持していたのですね。

南組惣会所は、本町10丁目（現. 4丁目）に発足しました。その碑が、今の南大江保育所の敷地内にあります。

まとめてみると、当時の構図は、
【大坂城代-大坂町奉行-惣年寄-町年寄-町民（町人・借家人）】
という体制になっていたのです。（右上に続く）

（左下からの続き）

「惣年寄」の下に各町ごとにあった「町年寄」は、奉行所からの触書（情報）を町中へ伝える、火元の取り締まりと火の用心をする、訴訟事件の調停・和解役をする、家屋敷の買受・譲渡に関わる書類を作成する、諸役銀（武家時代の雑税）を徴収する、水帳絵図などの書類を作成・保管する、町や橋や浜先の掃除をする、……という、とても忙しく様々な仕事があったとのこと！

今の町会の仕事のほか、役所的な機能もあったことがわかりますね。

軍事産業から発展したメンズファッション

大化の改新後に築かれた壮大な都、難波宮ですが、その場所が特定されたのは、昭和29年から始まった発掘調査によるもので、意外と最近のことってご存じでした？

ただ、大江の地で育った「難波っこ」の地元の方々に聞くと、この地の想い出は、歩兵「第八連隊」がいたことだそうです。現大阪家庭裁判所のところに連隊長の官舎があり、出退勤時間には馬に乗った連隊長さんをよく見かけたという、今では想像もつかない光景が見られました。また、戦後はメンズファッション産業で栄えた谷町筋界隈ですが、その技術はもともと軍服の製作から発展したのでした。

法円坂にあった「第八連隊」（国立国会図書館　蔵）

いつでも見れる！歴史ロマンあふれるスポット

南大江小学校の正門近くで、豊臣に起源をもつ建造物をいつでも見ることのできる場所があります。

明治の下水道改良工事で改良が加えられましたが、今も現役で活躍中！区民が使った下水を西へ流しています。昭和60（1985）年に地下に埋もれている太閤下水を見えるようにと、地域からの要望で整備されました。また、大阪市文化財の指定を受けたのを契機に、平成18（2006）年度に、いつでも見れる「のぞき窓」ができました。上から見ると、深さ約2m幅約2mの石組の水路に、東（大阪城）から西（東横堀川）へと、淀（よど）みなく水の流れる様子が見えました。フィールドワークでも「あるのは知っていたけど、実際見たのは初めて」という人が多数。

皆さんも、一度足をとめて、のぞいてみてください。

※【中央区史跡文化事典「太閤（背割）下水」を参照】
■地下からの見学を希望する場合は、（財）大阪市下水道技術協会まで。電話06-4963-2092

耳寄りばなし「大村益次郎」前で会おう！

南大江で待ち合わせするなら…「あの大きな石碑で」。でも、あの石碑はいったい何の碑なのでしょうか？？

難波宮跡西南の上町交差点に面して建つ巨大な碑に、医学、兵学等の秀才、「大村益次郎」の像が描かれています。松下幸之助さんなどが石碑建立の発起人とわかれば、碑の巨大さにも納得できますね。

大村益次郎が治療を受けた浪華仮病院があった当地に碑が建てられました。また、この大村益次郎は、近代陸軍兵制を確立させ、人の育成に尽力した人です。

凹凸のある像は迫力があります

発起人には有名な人の名前も…

※詳しくは【中央区史跡文化事典「大村益次郎卿殉難報国の碑」を参照】

引き継がれ、育まれる

地域の取組み

町人文化って昔の話だよね。いやいや、今の時代に受け継がれ、現在の住民ニーズに応じた新たな取組みも始まっていますよ。

歴史を伝え、地域活動を育む南大江小学校下

ブルーの制服で地域を守る

南大江校下では、小学校を拠点に活発に地域活動が行われています。そのひとつが毎年開催されている、地域文化祭「たんぽぽの会」。手作り作品の展示、歌や演奏、ダンス、民謡、その他舞台披露などを通じ、新しく区民になった方々との接点の場となっています。

平成22年12月にスタートされたのが「クリーン作戦」。写真のようにブルーのウインドブレーカーを着たメンバーが清掃活動、子どもたちの見守り活動を行っています。町に安全と安心がひろがっていければという思いから、一致団結した取組みがはじまったのです。

地域のサロン「路地カフェ」

谷町筋からそっと導くようにつづく路地の奥に、お洒落なカフェがたたずんでいます。「地域の人が気軽に集えるように」と工場を改装してつくられた、その名も「路地カフェ」です。

かつての工場の構造を活かしてつくられた広々とした静かな空間

以前、鉄工所だった建物をカフェに改装。安価な料金で、貸ギャラリー・貸スペースとしても利用でき、近くの町会やマンションの総会などにも使われています。入口に並ぶ手づくりの品々は、隣の作業所『こはる苑』でつくられた作品やお菓子。ボランティアさんの作品も。「社会との接点として、普通に入ってきてもらえたらうれしい」と代表の中野さん。小物以外に、農薬も化学肥料も使用していない野菜の販売など、みんながいいねと思う活動が少しずつ広がっています。

■問合せ：路地カフェを運営している『こはる苑』まで。
電話：06-6762-0323　（こはる苑は知的な障がいを持つ人たちのための生活介護事業所です）

熊野街道の風情を残す安堂寺町の街並み

安堂寺町通はメインストリート

八軒家浜から南下する熊野街道が東に折れる通りが、安堂寺町通。東へ少し進んだところで、再び南に折れると熊野方面へ、そのまま東へ向かうと伊勢や奈良方面へと向かうことになる、かつては東西のメインストリートでした。

東西のメインストリートだった昭和30年代の安堂寺町通

「踊り踊るなら～♪」の安堂寺町踊り

人が行き交うところ賑わいあり。安堂寺町通は、かつて夜店やお祭りで賑わっていました。祭りは昭和25（1950）年頃から8年ほど行われ、キーパーソンは「Bar Berジロー」のジローさん。ジローさんは役者の知り合い（文楽座など）が多く、有名人が芸を披露。またこの辺りは、土地柄家持ちさん（地主さん）が多く、祭りの日の当日は仮装パーティのように衣装をこしらえて、盛り上がっていたとのことです。寶泉寺の入口のすぐ西の道路に櫓（やぐら）を組んで、その横で輪を作って踊っていたそうです。

仮装パーティーのように盛り上がった安堂寺町通でのお祭り

安堂寺町通の夜店復活！

かつての賑わいが平成21（2009）年の夏、8月に復活しました。きっかけは昭和の祭りの写真が出てきたことから。安堂寺町に設計事務所を構える内田さんを中心に、地域の方の協力のもと、写真を収集。治道に昔の写真の展示やスライド上映、さらにオカリナ、ピアノ演奏などで昔話に盛り上がる夜店が復活されました。

昔の夜店では、みんなで「安堂寺町踊り」を歌い楽しんだと聞き、その安堂寺町踊りの節（歌詞）をイベント案内チラシに掲載したところ、「昔をよく知る方から『この言葉は違うよ』とつっこみを受けるなど反響の声があがりました」と話す内田さん。推進委員の米谷さんもその節を覚えているとのことでした。

安堂寺町界隈の古い写真収集は継続中。心当たりのある方はぜひご連絡を！
■安堂寺界隈ご近所プロジェクト
問合せ：06-6761-5146

内田さん

大槻能楽堂

[舞台を楽しむ3つのヒミツ]

難波宮跡の南側にある500席の定席を持つ大槻能楽堂は、昭和10年に大槻十三氏により設立された大槻清韻会能楽堂が、建て替えられたものです。中に入るとスケールの大きさと静けさに、自然と背筋がピンと張ります。

舞台正面の「鏡板」の松に描かれた豚の鼻のような節、大阪城で一番大きな石垣を写してつくられた「橋掛（登場人物が歩く橋）」の背景、そして、「どうして舞台床を軽く足で踏んだだけで、大きな音がでるんだろう？」という謎を解く、舞台下の十数個の甕（かめ）。感動と驚きの中で、冷静に舞台を楽しむ3つのヒミツです。

ただ、音響に優れた空間は、感嘆の声も、ひそひそ話もよく聞こえますからご注意をとは、広報担当の松田さん談。

昭和34（1959）年の改築時。前に市電の線路も。（提供：大槻能楽堂）

建物ができた当時、珍しかった椅子席。小さな声でもよく響きます

[戦前から椅子席のハイカラ能楽堂]

今の建物は昭和58年完成。以前の木造の建物は、当初から椅子席で、レストランにはシャンデリアもあったハイカラな社交場で、通りには鼓の音がよく響いていたとのこと。

[能は初めてでも…]

大槻能楽堂主催の自主公演は、月1～3回。年間にすると、約20回！能が初めての方でも本格的に楽しむことができる「お話」も一緒にある公演もあるとのこと。一度気軽に能楽堂に行ってみては？

舞台下の甕を見学しました。いくつ甕が見えるでしょうか？

■大槻能楽堂　http://www.noh-kyogen.com
電話：06-6761-8055　住所：中央区上町A-7